

(国語)

○ 実施時間 【8:30~9:20】(50分)

○ 次の注意をよく読んでおくこと。

- (1) 「始め」の合図があるまで問題用紙を開かないこと。
- (2) 問題は **一** ~ **三**、16ページまであります。
- (3) 答えはすべて解答用紙の解答欄にはっきりと、ていねいに書きなさい。
- (4) 答えを直すときは、きれいに消してから書きなさい。
- (5) 内容に関する質問は受け付けません。
- (6) 気分が悪くなったり、トイレに行きたくなったりしたら、手をあげて監督の先生に合図しなさい。
かんとく
- (7) 「終わり」の合図があったら、直ちに筆記用具を置き、解答用紙が回収されるまで待っていなさい。
- (8) 解答上の注意
 - ・字数指定のあるものは、句読点〔。、〕および「」や()なども一字と数えること。なお、一マスには一字しか入れられません。
 - ・文末表現は、「こと」、「から」など、問い合わせる形にし、文の終わりには句点〔。〕をつけなさい。

受 験 番 号		氏 名	
------------------	--	--------	--

一 次の――のカタカナを漢字に改めなさい。

① キソク正しい生活を送る。

② 京都をケイユして大阪へ向かう。

③ 記者カイケンの様子を放送する。

④ 歴史的に重要なイギを持つ建物。

⑤ その説明にはホソクが必要だ。

⑥ 時代のチヨウリュウに乗る。

⑦ 荷物を無料でハイタツする。

⑧ 腰にフタンがかかる。

⑨ 電車に乗るためにエキシヤに入る。

⑩ ヒタイの汗をふく。

二 次の I・II の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。なお、本文中の図とは、10ページの問8で扱われている図のことです。

I

「環境」には私がいない

ここでひとつのかたかなの仮説ですが、こうして環境問題に対し具体的な行動を起こすことが難しいのは、環境よりも経済性を優先する仕組みになっているということと共に、「環境」という言葉が前提とする人間と自然の関係性に原因があるのではないでしょうか。環境問題について話しているとき、私たちは環境が観察でき、分析^{ぶんせき}でき、より好ましい状態に変化させていくために、外部から働きかけることができるものとして扱っています。こうした前提において、環境に働きかける私（＝人間）は、対象である環境の外側にいるものとして扱われます。この様子を画^えにすると、ちょうど図の「環境と人間の関係性」の右側のイメージです。

対象である環境に外部化されたところに立つてみると、まるで気候変動という流行り病にかかってしまった「環境」という患者さん^{せんたく}に対し、処方箋^{じょほうせん}を出す医師のように、私（＝人間）は第三者的に環境と向き合うことになります。こうしたものを見方は、状況^{じょうきょう}を俯瞰^{ふかん}して適切な対処を考えることにおいては有効ですが、こと環境については、人間も環境のなかにいる存在ですから、このとらえ方は実際の状況とのズレがあります。

さらに留意すべきことは、全ての人が医師になれるわけではないので、世の中の大多数の人々は処置を見守るという選択^{せんたく}をします。その間、自分も流行り病にかかるないように、手洗いやうがいなどの予防策に努めます。予防策に努めるのですが、意外と徹底^{てつてい}するわけでもなかつたりします。なぜなら、万が一に病にかかってしまっても医師が治してくれるだろうとXからです。病には治療法^{ちりょうほう}があるだろうと信じていています。こうして徐々に、専門知識^{じゅもんちしき}が必要な事柄^{ことがら}については専門家に一任するようになり、やがて状況に対しても自分で考えることを止めてしまいます。環境問題に関しても、専門家が処方してくれた技術や制度に従うことによつて、地球生態系の許容範囲内^{はんい}で暮らしていく仕組みが社会に導入されるようになる日を安静にしながら待つ、ということが賢い選択^{せんたく}のように思えてきます。

② がじこ

」のように環境問題について人間と環境を切り分け、高度な分業化でそれぞれの分野の専門家に任せることで解決策を模索しているのが、今日の環境問題の構造のようです。また、本書で何度も出てきているSDGsについても同じ構造が生まれつあるのではないでしょうか。例えば、二〇三〇年までの全人類の開発目標として一七目標が示されているわけですが、これを全て言える人はどのくらいいるでしょうか。ましてその背後に一六九のターゲットがあると聞けば、もうこれは専門家に任せるのが最良の策のように思えます。

」のように、対象を外部に切り出して、それぞれの分野の専門家に対応策を提案してもらいうとい構造がつくられていく」とで起きるのは、「主語の留守状態」であり、やがて「環境」には「私」がない」という状態になります。「環境—人間」というように、主体と客体を切り分けて物事をとらえることは、近代科学の基礎的な作法です。私たちはこの作法にすっかり慣れてしまつており、これによつて導き出される」とを客観的な事実とし、主観的な意見を凌駕するものとして扱つてきました。i、環境問題における人間は、環境それ自体の内側に居ますから、客観的な事実を導きだす当人の主観的な意見もはじめからそこに含まれる」となります。輪の外側をなぞつていたら実は輪の一部が捻れてつながつていて、いつの間にか輪の内側をなぞることになるメビウスの輪のような感覚かもしれません。」うした視点の捻れをどのように解消したらよいのでしょうか。私は、そのヒントが「風土」という概念にあると考へています。

II 風土のサステイナビリティ

環境(Environment)の語源には「周辺」という意味がありますが、日本語には環境の他にも人間と自然の関係をとらえるときにもまた同時に自然は人間につくられる、という相互に定義し合う関係にある。こうした相互に定義し合う関係性を「逆限定の関係」と表現したいと思います。こうした自然と人間の関係性を絵にしたもののが、図の左側のイメージです。

その上で、風土は「私たち」という主語で用いられるという特徴があると考えています。なぜならあるひとつの風土は、その風土が形成される地域に暮らす・関わりのある人々の間で共有され、語られるものだからです。風土は個人が認知できますが、個人が単独で形成することはできません。風土は常にある地域に暮らす・関わりのある人たち（＝私たち）を主語として語られます。例えば、「この町では」、「この地域では」、「うちちは」などといった表現がこれにあたります。

」のように、風土は「私たち」という主語を伴つて、人間と自然とのあいだのひとまとまりの関係性を表しています。」の」とは同時に、個々の土地」とに異なる風土があることを意味します。ii、地域Aに暮らす私たちにとっての風土と、地域Bに暮らすあなたたち（地域Aのそれとは別の私たち）にとっての風土は異なるといふことです。

異なる風土を語るいくつもの「私たち」がある」とを認める」とで、多元的な世界観を受け入れることができます。「環境—人間」というような、^{注7}二項対立的な世界観における客観的対象としての「環境」では、全地球・全種的に共有しているひとつの環境がある」ということが前提になっていますが、複数の異なる「私たち」をはじめから内化している風土は多元的な世界を前提にしているのです。

風土では自然と人間が不可分なひとまとまりの関係としてありますから、この風土の視点においてサステイナビリティを考え行動する（＝「何をまもり、つくり、つなげていきたいのか」を考え行動する）ことが、ひいては自然をつくる」とになり、そしてまた、つくつた自然に人間がつくられる関係へ展開していく」と同義になります。」の」とを従来の「環境のサステイナビリティ」に対し、「風土のサステイナビリティ」と呼びたいと思います。

※ 原文にあつた図は、作問の都合上省略しました。

注 1 処方箋……医師が患者に与える薬の名前や分量などを指示した文書。

注 2 俯瞰……高い所から広く見渡すこと。

注 3 SDGs……すべての人たちにとってより良い世界をつくるために国連総会で採択された十七の目標。

注 4 凌駕……他のものを上回ること。

注 5 概念……「…とは何か」ということについて、多くの人が持つ共通理解や考え方。

注 6 多元的……多くの要素が関わり合っている様子。

注 7 二項対立……物事に対する二つの考え方が対立する、または両立しない状態。

問 1 ——①とありますが、「人間」が「第三者的に環境と向き合う」とはどうのことだと考えられますか。二十五字以内で説明しなさい。

問 2 X には、「大した」とはないと物事を甘く見てかかる。」という意味の慣用表現が入ります。入る言葉として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 茶化している イ 足下を見ている ウ お高くとまっている
エ 高を括っている オ 鼻にかけている

問 3 ——②とありますが、筆者の考える「世の中の大多数の人々」の考え方を述べたものとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 環境問題のような大きな問題は、一人一人の個人レベルで解決できるようなものではないことに気づくべきだ。
イ 環境問題は長い時間をかけて解決すべき問題であるが、現在の自分に直接被害が及ばないのならば完全に無視した方が得だ。
ウ 環境問題は人間にはどうすることもできないものであり、立ち向かう労力はむだにしかならないことがあきらかだ。
エ 環境問題に対しては一人一人がバラバラな動きをすることはかえって状況を悪化させるので、何もしない方が好ましい。
オ 環境問題は知識を持つた人間でなければ問題を解決できないし、誰かが問題を解決してくれるのを待てばよい。

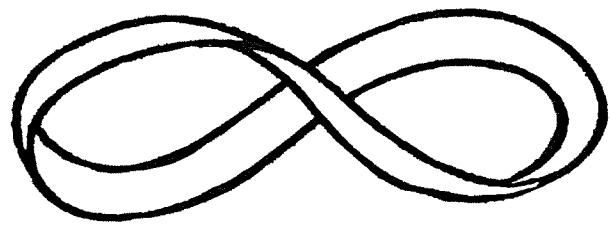
問 4 ——③とありますが、これは環境問題と人間がどのような関係にある状態ですか。このような関係になる過程を明らかにしながら、六十字以内で説明しなさい。

問 5 i・iiに入る言葉として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア さらに イ しかし ウ また エ あるいは
オ つまり カ なぜなら

問6 次の会話文は、――④について、中学生の獨太くんと協平くんが話し合っている場面です。この会話文を読んで、後の（1）（2）の間に答えなさい。

獨太 この絵を見て。これはメビウスの輪だよ。僕はメビウスの輪がどんなものか分からなかつたからインターネットで調べてみたんだ。平面で作られた、捻れた輪つかのことと、その輪つかをなぞつていくと表側からいつの間にか裏側に回つてしまう不思議なもののことだと分かつたよ。



協平 たしかに輪つかが捻れていて表と裏が連続しているね。本文にも「輪の外側をなぞつていたら実は輪の一部が捻れてつながつ

ていて、いつの間にか輪の内側をなぞる」となる「って書いてあつたけれど、正反対のものとして区別されていた裏表が連続していく分からなくなつてしまふ」というのは不思議だね。「～ような」という言い回しをしているから、この比喩の種類は

Y 喻だね。

獨太 輪の外側をなぞるというのは、環境問題における人間が、Z にもとづいて、「客観的な事実」を重視する行動を表しているね。でも環境問題では「客観的な事実」を導くつもりでも「主観的な意見」が混じってしまうんだ。そのことを筆者は「いつの間にか輪の内側をなぞる」と表現しているんだね。

協平 すぐ難しいことを言つていると思つたけれどもそういうことなのか。筆者が何を言おうとしているのかイメージできたよ。

(1) Y に入る漢字一字を答えなさい。

(2) Z に入る言葉を本文中から十一字でぬき出して答えなさい。

問7 ――⑤の説明として正しいものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 「私たち」とは、一人一人が異なる文化を持ちながらも同じ土地で暮らす人々である。
- イ 「私たち」とは、土地ごとに異なる風土を語る、それぞれの集団のことである。
- ウ 「私たち」とは、個々の土地に暮らしながら全地球・全種的に共有しているひとつの環境があることを前提とした集団である。
- エ 「私たち」とは、暮らしている場所にかかわらず同じ一つの目標を共有する人々である。
- オ 「私たち」とは、自然に作られる存在であり、同時に自然を作る存在である。

問8 次に示す図は、本文中の二カ所の『』の中の「図」に関するものです。図のa～cにあてはまる言葉の組み合わせとして正しいものを後のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

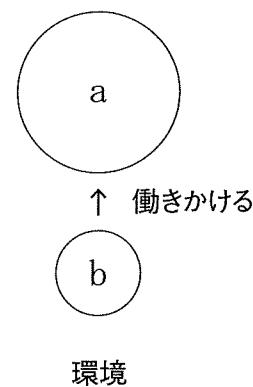


図 環境と人間の関係性

ア	a	環境	b	人間	c	環境・人間
イ	a	人間	b	自然	c	自然・人間
ウ	a	環境	b	人間	c	自然・人間
エ	a	人間	b	自然	c	環境・人間
オ	a	風土	b	人間	c	自然・人間

三 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

父親に関して覚えていること。

もちろん父に関して覚えていることはたくさんある。なにしろこの世に生を受けてから、十八歳になつて家を離れるまで親子として、それほど広くもない家の中で、ひとつ屋根の下で、当然のこととして毎日起居^{注1}を共にしていたのだから。僕と父の間には――おそらく世の中のたいていの親子関係がそうであるように――楽しいこともあれば、それほど愉快^{ゆか}ではないこともあつた。でも今でもいちばんありありと僕の脳裏に蘇^{よみがえ}つくるのは、なぜかそのどちらでもない、とても平凡^{へいほん}な日常のありふれた光景だ。

A こんなことがあつた。

我々が夙川^{しづかわ}(兵庫県西宮市)の家に住んでいる頃^{ごろ}、海辺に一匹^{一匹}の猫^{ねこ}を棄てに行つたことがある。子猫ではなく、もう大きくなつた雌猫^{めす}だつた。^①どうしてそんな大きな猫を棄てに行つたりしたのか、よく覚えていない。我々が住んでいたのは庭のある一軒家だつたし、猫を飼うくらいのスペースはじゅうぶんあつたからだ。あるいはうちにいついた野良猫のお腹が大きくなつてきて、その子供の面倒まではみられないと親は考えたのかもしれない。でもそのあたりの記憶^{きおく}は定かではない。いずれにせよ当時は、猫を棄てたりすることとは、今に比べればわりに当たり前の出来事であり、とくに世間からうしろ a を差されるような行為^{こうい}ではなかつた。猫にわざわざ避妊手術を受けさせるなんて、誰も思いつかないような時代だつたから。僕はまだ小学校の低学年だつたと思う。おそらく昭和30年代の初めだつたろう。うちの近くには、戦争中に米軍の爆撃^{ばくげき}を受けたままの銀行の建物がまだ残されていた。まだ戦争の b 痕^{あと}が残つていた時代だ。

ともあれ父と僕はある夏の午後、海岸にその雌猫を棄てに行つた。父が自転車を漕ぎ、僕が後ろに乗つて猫を入れた箱を持つていった。夙川沿いに香櫞園^{さちのえん}の浜まで行って、猫を入れた箱を防風林に置いて、あとも見ずにさっさとうちに帰つてきた。うちと浜とのあいだにはたぶん二キロくらいの距離^{きょり}はあつたと思う。当時はまだ海は埋め立てられてはおらず、香櫞園の浜は賑やかな海水浴場になっていた。海はきれいで、夏休みにはほとんど毎日のように、僕は友だちと一緒にその浜に泳ぎに行つた。子供たちが勝手に海に泳ぎ

に行くことを、当時の親たちはほとんど氣にもしなかったようだ。□B 僕らは自然に、いくらでも泳げるようになつた。夙川にはたくさんの魚がいた。河口で立派な鰻を一匹捕まえたこともある。

とにかく父と僕は香櫞園の浜に猫を置いて、さよならを言い、自転車でうちに帰ってきた。そして自転車を降りて、「かわいそうやけど、まあしようがなかつたもんな」という感じで玄関の戸をがらりと開けると、さつき棄ててきたはずの猫が「にやあ」と言つて、尻尾を立てて愛想良く僕らを出迎えた。先回りして、とつくに家に帰っていたのだ。どうしてそんなに素速く戻つてこられたのか、僕にはとても理解できなかつた。なにしろ僕らは自転車でまつすぐ帰宅したのだから。父にもそれは理解できなかつた。だからしばらくのあいだ、一人で言葉を失つていた。

そのときの父の^②果然とした顔をまだよく覚えている。でもその果然とした顔は、やがて感心した表情に変わり、そして最後にはいぐらがほつとしたような顔になつた。そして結局それからもその猫を飼い続けることになつた。そこまでしてうちに帰つてきたんだから、まあ飼わざるを得ないだろう、という^③諦めの心境で。

うちにはいつも猫がいた。僕らはそれらの猫たちどうまく、仲良く暮らしていたと思う。そして猫たちはいつも僕の素晴らしい友だちだった。兄弟を持たなかつたので、猫と本が僕のいちばん大事な仲間だつた。^④縁側で（その時代の家にはたいてい縁側がついていた）猫と一緒にひなたぼっこをするのが大好きだつた。なのにどうしてその猫を海岸に棄てに行かなくてはならなかつたのだろう？なぜ僕はそのことに対しても異議を唱えなかつたのだろう？ 那^⑤は——猫が僕らより早く帰宅していしたことと並んで——今でも僕にとつてのひとつ^{なぞ}の謎になつてゐる。

もうひとつ父に関するよく覚えていること（ちなみに村上千秋^{ちあき}というのが父の名前だ）。

それは毎朝、朝食をとる前に、彼が仏壇に向かつて長い時間、目を閉じて熱心にお経を唱えていたことだ。いや、仏壇というのではなく、そんな小さなガラス・ケースに向かつて毎朝お経を唱えていたのだろう？ それも僕にはわからないことのひとつだ。

しかしいずれにせよ、それは父親にとって一日の始まりを意味する大事な習慣になつていて。僕の知る限り一日たりともその「おつとめ」（と父は呼んでいた）を怠らなかつたし、誰にもその日々の行いを妨げることはできなかつた。そして父の背中には、簡単には声をかけがたいような厳しい雰囲気が漂つっていた。そこには「日々の習慣」というような簡単な言葉では片付けられない、普通ではない——と僕には思えた——強い集中があつた。

子供の頃、一度彼に尋ねたことがあつた。誰のためにお経を唱えているのかと。彼は言つた。前の戦争で死んでいった人たちのためだと。そこで亡くなつた仲間の兵隊や、当時は敵であった中国人たちのためだと。父はそれ以上の説明をしなかつたし、僕はそれ以上の質問をしなかつた。おそらくそこには、僕にそれ以上の質問を続けさせない何かが——場の空気のようなものが——あつたのだと思う。しかし父自身がそれをはばんでいたわけではなかつたという気がする。もし尋ねていれば、何かを説明してくれたのではあるまいか。でも僕は尋ねなかつた。おそらくむしろ僕自身の中に、^⑥そうすることを阻む何かがあつたのだろう。

（村上春樹『猫を棄てる 父親について語るとき』文藝春秋より）

注1 起居……日常の生活。

注2 香櫞園……兵庫県西宮市の夙川中・下流域の地域名。

注3 菩薩……仏教で、仏になるために悟りを開き、命あるすべてのものを救おうとして修行を重ねる者。

問1

A・Bに入る言葉を次のの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ または ウ でも エ まだ オ たとえば カ それとも

- 問2 —①「どうして」は、次のア～カのどの言葉にかかるていますか。記号で答えなさい。
- どうして
 そんな／大きな／猫を／棄てに行つたりしたのが、／よく／覚えていない。

問3

a～cには、体の一部を表す漢字が入ります。入る漢字を次のの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 髮 かみ イ 眼 まなこ ウ 口 くち エ 首 くび オ 指 さし カ 爪 つめ キ 腹 はら ク 背 せ

- 問4 —②とあります、父が「呆然とした顔」をしたのはなぜだと考えられますか。理由を七十五字以内で答えなさい。

- 問5 —③とありますが、父が「いくらかほつとしたような顔になつた」理由として最もふさわしいものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア 猫を棄てに行つたことに対する気がとがめていたものの、猫が無事に戻つてきたことで、再び多くの猫を飼い続けられることとなり、うれしく思つたから。

イ 猫が戻つてきたことによって、猫を棄てに行つたというやるせなさから解放された上、近所の人に知られる心配もなくなり、安心したから。

ウ 飼い続けてきた猫が、棄てられたという逆境をたくましく乗り越えてきた様子を見て感心すると同時に、誇りに思ったから。
 エ 猫を棄てたことで「僕」を嫌な気持ちにさせてしまつたが、猫が戻つてきたことで「僕」の機嫌が直り、一安心できたから。
 オ 猫を棄ててきた」とに対して少なからず後ろめたさを感じていたが、猫が戻つてきたことで、多少なりとも気持ちが楽になつたから。

- 問6 —④「それ」が指す内容を説明したものとして最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」の一番の友だちであった猫を、どうしてわざわざ海岸まで棄てに行かなければならなかつたのかといふ」と。
 イ 「僕」にとつて大切な存在であつたはずの猫を、なぜ棄てなければならなかつたのか、そして、なぜ棄てる」とを受け入れてしまつたのかといふ」と。

ウ 普段から仲良く一緒に暮らしていた猫に対して、どうして棄てるなどといひふ」とが出来たのか、「僕」自身全く理解出来ていないと」と。

エ 猫を棄てようといふ父の提案に対して、どうして「僕」はもつと強く反対する」とが出来なかつたのかといふ」と。
 オ 仲良く暮らしていたはずの猫たちと、どうして一緒に暮らす」とが出来なくなつてしまつたのかといふ」と。

問7 ——⑤「そうすること」の内容を四十字以内で答えなさい。

問8 次のA～Fの生徒たちが、本文の表現について意見を述べています。本文の表現の特徴を正しく説明している生徒の発言をすべて、選び、A～Fの記号で答えなさい。

A 生徒A 数十年経つても、大切にしていた猫を棄てる」とを主導した父が許せないという、「僕」の父に対する怒りがよく伝わる

てくる文章だったね。

イ 生徒B 父と「僕」の会話がうまくかみ合っている」と、文章全体に一定のリズムが生まれていて、読みやすい文章となつ

ているね。

ウ 生徒C 「僕」が、父との過去の出来事を思い返しながら語っているね。つまり、「僕」による回想形式で物語が進んでいると
言えるよ。

エ 生徒D 「いずれにせよ」という言葉が本文中に二度も出て来ている」とから、何かを決断することが苦手な「僕」の性格が
よく表れている文章だと言えるね。

オ 生徒E 「廃墟になつたままの銀行」や、父の「おつとめ」の様子などから、「僕」が回想している時代には戦争の影響えいきょうが残つ
ている」とが読み取れるよ。

カ 生徒F 猫の目線から丁寧に情景が描かれている場面も多く、読者が猫に対して感情移入しやすくなるような工夫がなされて
いるよ。

このページに設問はありません

このページに設問はありません

このページに設問はありません